

改革教会世界共同体総会報告

牧師 大石周平

六月二十九日から七月七日まで、ライプツィヒで行われた改革教会世界共同体(WCRC)総会に、ヴィジターとして参加した。主題は「生ける神よ、我らを刷新し変革してください」。二百以上の教会の千人以上が参加。日本からは、当教会三名、在日大韓一名、日本キリスト改革派二名。かつての会議で知り合った台湾・韓国・香港の兄弟姉妹との再会や新たな出会いを喜びつつ、連邦大統領やモルトマン博士など多彩な顔触れも集う礼拝・会議の場に連なつた。ライプツィヒは、五百年来の宗教改革ゆかりの町。その上、ユグノーの亡命・敬虔主義・バッハの音楽・壁を破る東独の市民運動等の記憶が刻まれ、幾重もの歴史の深みに圧倒された。ルーテル派と改革派の教会が、どの時代をも映す鏡であることが印象的だった。

さて、WCRC本部がジュネーブからハノーファーに移転して最初の総会で、同組織がドイツ改革教会連盟とオフィ

スビルを共有し関係を深めていることも、かの国に行つてよく分かつた(渉外委員会便り参照)。前総会から七年の間、WCRC最大の課題は財政危機の克服。移転はその対策だったという。本総会でも、「国際的財政経済機構」の構築が重要な課題とされていた。

神学上は、地上の正義に焦点を当てた「アクラ文書」の線で変わらない。ベルリンへのディアコニア・ツアーは勉強になったものの、全体として地上のコンテクトを聖書テクストより重視するイデオロギーに陥らないかとの数年来の懸念がぬぐえなかつた。格差や不義の是正、難民との連帯、国家社会の構造・慣習からの解放、環境保護等に関する、聖書的・神学的な省察が、今後の加盟教会の緊急の課題だと思わされた。

大型バスで移動した「ルターの町」ヴィッテンベルクでは、ローマ・カトリックとルーテル派による「義認の教理に関する共同宣言」に、メソジスト派同様改革派も(付帯文書を添えて)連なるにあたり、記念礼拝と調印式が行われた。また、ルーテル世界連盟とWCRCは協

約文書「ヴィッテンベルク証言」にも著名。この件でも、神学的吟味が一層求められるが、多様性における一致の願いを、教派を超えて共有できることは嬉しいことに違いない。加えて特別プログラムで、北朝鮮と韓国の教会が共に聖餐を祝う「レインボーランチ」に招かれたことも、「報告しておきたい」。

その他としては、女性の按手を巡る議論の激しさに驚いた。加盟教会の内でも最初期に女性教職を認めた日本キリスト教会が、議論に一石を投じる場面もあつた。その余韻も冷めやらぬ最終日、選ばれた新議長ナイラ・カッサブ牧師(シリア・レバノン福音教会)は女性。次回は日本の教会からも、女性や青年の出席が叶うと良いと思う。

委員会便り

◆ 第六七回日本キリスト教会大会が十月一七日(火)〜二〇日、柏木教会に於いて行われます。正議員として大石周平牧師、員外議員として奥野玲子議員が出席します。